

回覧

作文集

主	青	稲
張	少	敷
大	年	市
会	の	Inashikishi seisyonen no syucyo taikai

令和六年度

第十八回

青少年  
気にか  
目をか  
声かけよう

青少年の声に  
耳を傾けてみませんか？





青少年育成稲敷市民会議  
会長 和田 克典

## ごあいさつ

来年3月22日に稲敷市市制施行20周年を迎えます。

青少年育成稲敷市民会議主催の青少年の主張大会も、青少年の社会への関心や視野を広めるとともに、物事を論理的に考える力や自らの主張を正しく理解してもらおう力などの育成を図るため、取り組んでまいりました。

最初の年（平成17年度）と新型インフルエンザが流行した年（平成21年度）は開催できませんでしたが、今回で18回（文書発表も含む）を迎えることになりました。この間、こどもの数の減少や学校の統廃合もありましたが、市民の皆様のご理解のもと、多くの先輩の

方々や関係者の方々の熱意と努力によって支えられ、継続することが出来ております。皆様方に、心より感謝を申し上げます。

さて、今回の第18回青少年の主張大会は、市内の小中学生（4名）・中学生（4名）・高校生（2名）の10名の皆様方に、発表していただきます。

発表内容は、①友達関係や挨拶など、学校生活を通して学んだこと②「SDGs」の環境問題で自分たちができることは何か③災害や戦争など、今社会や世界で起きている出来事に関することなどです。

一人一人の熱い思いが伝わってくる大変素晴らしい内容となっております。

今年の夏は、「命に関わる危険な暑さ」などと言われ、例年以上に異常な暑さ

に見舞われました。そのため、熱中症対策をとる必要もあり、屋外等の活動が制限される事になりました。そんな中、夏休みに青少年の主張大会の原稿をまとめてくださった発表者の皆様方には、大変なご負担をお掛けしたのではないかと思います。ありがとうございます。

発表者の皆様方、本当にありがとうございます。

最後になりましたが、事務局の方々はじめ、市民会議の関係者の方々、そして、ご協力・ご支援をいただきました教育委員会の方々、厚く御礼申し上げます。

また、保護者の方々、学校の先生方にも発表にあたり、熱心なご指導等を賜りました。皆様方にも心より感謝を申し上げます。

# 目次

## ■ごあいさつ

青少年育成稲敷市民会議 会長 和田克典 1

## 作文発表

### 小学生の部

#### 1 言い返されてもあきらめない

江戸崎小学校

六年

菅 谷 寧 音

4

#### 2 人

新利根小学校

六年

松 浦 彩 愛

6

#### 3 半径五メートルの幸せ

あずま東小学校

六年

今 泉 志 歩 子

8

#### 4 私たちが今できること

あずま北小学校

六年

有 馬 愛 桜

10



## 中学生の部

5 SDGsと私たち

江戸崎中学校

二年

神保宥介

12

6 素敵な未来のために

新利根中学校

二年

濱田珠実

14

7 意識し続けること

桜川中学校

二年

飯嶋真由

16

8 挨拶の力

東中学校

二年

関義孝

18

## 高校生の部

9 社会に向けて

江戸崎総合高等学校

二年

高須美羅唯

20

10 干しいもで変える未来

江戸崎総合高等学校

二年

福島朔弥

22

■ 講評

稲敷市教育委員会指導室

川村満博 24

## 1 言い返されてもあきらめない

江戸崎小学校 六年 菅谷 寧音

「関係ないでしょ。」

これは、友達の口げんかを止めようとしたとき、毎回のようにならぬてきた言葉です。私の学年は、一年生の頃から口げんかの多い学年で、毎週のように発生しては解決する繰り返し、巻き込まれて泣いてしまふ子もいたほどでした。きっかけは些細なことでも、クラスの友達が、仲のよい友達が口げんかをするのも嫌だし、見たくはありません。口げんかの後も、その二人の仲が悪いままであることも嫌です。時折、私は、反論されることが嫌で、止めに入ることをやめようかなと思いましたが、あきらめずに言い続けてきまし

た。

学校生活に慣れた二年生の頃、みんなが気軽に話せるようになって、私も毎日楽しく過ごしていました。新しい友達がどんどん増えて、学校に行くのが毎日楽しく感じていました。でも、仲良くなると同時に口げんかやトラブルも多くなり始めました。

あるとき、仲のいい友達同士で口げんかが始まり、これまでの楽しい時間が急変しました。その後も、仲直りができないまま、重々しい時間が過ぎました。せっかく仲良く楽しく過ごしていたのに、一気に無駄になっていました。(こんなことが

あつてはならない。)と思い、この

ときから、私は、口げんかを見かけたら、絶対に止めようと思いました。

しばらくたってから起きた口げんかは、お互いに言い合いがエスカレートしていて、周りのみんなが戸惑っていました。私は(止めよう。)そう心に決め、

「ケンカはやめようよ。みんな困ってるよ。」

と言いました。すると、返ってきた言葉が、

「関係ないんだから入ってこないで。」

この言葉に胸が痛くなりました。勇気を出して言ったのに。止めようと



したのに、関係ないって…。こんなこと言われるくらいなら、止めることやめようかな…。私は初めて自信がなくなっていました。

その後、その言葉が心に残り、何度もやめようと思いましたが、ここでやめたら、口げんかが増え、ケンカに発展し、学校を休んだり、学校がつまらないと思う人もどんどん出たりすると思いました。六年間、共に過ごす大好きなクラスメイトがそんな思いをすることは絶対嫌でした。そう考えたら、私は何度言い返されても、口げんかをやめさせることを続けていこうと決めました。

男子同士の口げんかは圧倒されま  
す。私は、迷いましたが、やっぱりダメだと思い、勇気をもって、「ダメだよ、ケンカしちゃー!」  
と言いました。だけど、返ってきた

のは、

「関係ないんだから、首突っ込むなよ。」

という言葉でした。ますますエスカレートしていく様子に、もう一回だけ止めようと言った時、言葉が重なりました。そこには、前に口げんかを止めて仲直りができた友達がい

て、一緒に止めに入ってくれていました。私は、(やっぱり、やってきたことは間違いないやなかったんだ。)と自信がわきました。

その後は、どんな口げんかにも立ち向かい、  
「やめなよ。」

「関係ないだろう。」  
の繰り返しですが、私には、同じ思いをもつ仲間ができたことがうれしく、その仲間と勇気をもって立ち向かいました。

六年生になった今、口げんかはありません。私が、大好きな友達との時間を大切にしたいという思いで始まり、仲間とともに今日まで続けてきてよかったと思いました。人間関係を築くためには相手としっかり向かい合うことが大切だと学びました。これからも、大切なクラスメイトとの時間を大事にしていきたいので、四月から始まる中学校生活の充実のためにも、何かトラブルがあった時は、私の思いを伝え続けたいです。

## 2人

新利根小学校 六年 松浦<sup>まつうら</sup> 彩愛<sup>あやめ</sup>

私には五才年下の弟がいます。弟は、負けず嫌いでも何でも一番にならないと気がすまない子です。ようち園でのかけっこ競争やゲームでは、常に一番をねらっていました。それは家でも同じで、食事の食べ終わる速さを競ってきます。「おれが一番に終わった。」と自慢げに言います。どんな小さなことでも一番の争いをしていきます。

あるとき、家の玄関に誰が一番に入れるか、弟が競争をしようと言ってきました。私も、弟に負けず劣らぬの負けず嫌いなので、挑戦をうけることにしました。もちろん私が勝ちました。負けた弟は悔しかったの

でしょう。大きな声で泣いていました。すると、「お姉ちゃんなんだから小さい子にゆずりなさい。」という母の怒った声が飛んできました。今思うと弟は六才、私は十一才で、少し大人げなかったかなと思いました。

今なら、母の言葉も気持ちもわかりますが、五年生の私にはその言葉が一番と言っているほど嫌いでした。お姉ちゃんなんだから、という理由で譲らなければいけないのは、どうしても納得できませんでした。その言葉を言われる度に、負けず嫌いの私は悔しくてたまりませんでした。姉というのは事実です。でも、

同じ人間、早く生まれたか遅く生まれたかの違いしかないと私は思います。例えば、弟と私が逆の立場だったら、お母さんに、「お兄ちゃんなんだから譲りなさい。」と怒られたらきつと、私と同じように悔しい気持ちになるのではないのでしょうか。

このような経験を通して、私は今回、「人」について改めて考えてみました。人は、誰でもいろいろな考えや個性を持っています。同じ考え方をしている人も全く同じ心をもってあるわけではありません。性格も全員が同じわけではありません。また、心のどこかで嫌な思いをしているときにも、その気持ちをかくして



しまい、自分の気持ちを正直に表現できないこともあります。もしも性格や個性、心の中がみんな同じだったら、きつと政治も要りませんし、社会問題も起こらないのではないのでしょうか。それは、少し良いことだと思うかもしれませんが。しかし、それでは毎日が同じで、変わる事が何一つない、つまらない世界だと私は思います。私たちを楽しませてくれる本やゲーム、テレビなどの発明もきつと存在しません。だからこそ私は、人の個性や心を大切にしたいと思います。人それぞれ個性や心があるからこそ毎日がコロコロと変わります。そして、毎日が変わるからこそ、いろいろな気持ちになったり、いろいろなものができあがったりするのではないのでしょうか。

今つらいことがあったり、悲し

かったり、逃げ出したりしたいことがあっても、あとで振り返るといい思い出になることもあります。つらいときがあつて、楽しいときがある、楽しいときがあつて、つらいときもある。人生すべてが思い通りにいくわけではありませんが、絶対に楽しいときはあります。また、何かを失敗してしまい、やり直したいと思うことがあつても、その失敗もふくめての今の自分になっていると思えます。大人気なく弟と競争し、母に姉だからという理由で怒られて、悔しかった思いも全部含めて私になっています。

完ぺきな人間は一人もいませんし、だからこそ人は、支え合って生きていくのだと思います。私は、毎日同じことのないこの世界を面白いと思います。私は、この世界を個性

や心を大切にしながら、支え合って生きていきたいです。

## 3 半径五メートルの幸せ

あずま東小学校 六年 今泉 志歩子

みなさんは、「平和な世界」と聞いたら、どんな世界を想像しますか。「犯罪がない世界」、「飢えに苦しむ人がいない世界」など、様々な世界を思い浮かべると思えます。私が考える「平和な世界」は、「戦争のない世界」です。

私が戦争について考えるようになったのは、ニュースでロシアによるウクライナ侵攻の映像を見たことがきっかけです。私の母は、初詣で必ず世界平和を祈ります。しかし、戦争の映像は見ません。子どもたちが戦争の被害を受けているのを見ると、辛くて落ち込んでしまうからだと言います。私は、母が目を背けた

くなるような戦争について調べてみようという気持ちがいってききました。

最初に調べたのは、戦争が起こる原因です。戦争は、民族・宗教・領土などの争いがきっかけで起こることが分かりました。難しいことは分かりませんが、私には、それらの争いが、戦争を起こす理由に値するとは、どうしても思えませんでした。こんな争いで、未来ある子どもたちの命や、楽しく穏やかに暮らしていた家族の日常を奪う人がいるなんて・・・。私の心には、怒りがこみ上げてきました。

次に、家族にも戦争について話を

聞きました。すると、母が、戦争を経験した私の曾祖父のことを話してくれました。兵士として戦地に赴いた曾祖父が、腕に銃弾を受けて、戦争の途中で帰って来たこと。その傷のせいで、ご飯も上手に食べられなかったこと。私は、その話を聞いて胸が苦しくなりました。

「戦争より怖いものはないんだよ。」これが、曾祖父の口癖だったそうです。戦争を経験した曾祖父の言葉だからこそ、とても心にしみたと、母が言いました。

曾祖父のように苦しむ人をこれ以上生まないためにも、私はすぐにも今起きている戦争が終わってほし



いと思いました。しかし、小学生の私には、直接戦地に行つて戦争を止めることはできません。「戦争のない世界」のために何かしたい、自分ができることは何か、と考えました。そんな時、私は学校で、「半径五メートルの法則」という言葉に出会いました。人は、生活環境の半径五メートル以内で人間関係を構築しているということ。半径五メートル以内の人たちを幸せにすることが、平和な世界の創造に向けた第一歩だそう。私はこの話を聞いて、「平和な世界」のために自分ができることは、まず自分の身の周りから平和にすること、つまり、「半径五メートルの幸せ」を目指すことだと気がきました。

私が過ごしている六年一組の教室は、まさに半径五メートルぐらいの

広さです。私は、放送委員会の委員長の仕事をしています。時間に遅れないように、言い間違えないように、と常に意識して活動することは、とても緊張します。うまく行かず、落ち込むこともあります。でも、仕事が終わつて教室に戻ると、友達が励ましの言葉をくれたり、拍手で迎えたりしてくれるので、とても幸せな気持ちになります。そんな時、私は、友達にもらつた幸せを他の誰かに分けたいと思います。自分がしてもらつたのと同じように、友達の頑張る姿を励ましたり、力一杯の拍手でたたえたりします。このように、知らず知らずのうちに、私も、「半径五メートルの幸せ」をつくる一員になつていくのだと思いました。

「半径五メートルの幸せ」が教室全体に広がれば、教室中が優しさに

あふれ、教室のみんなが幸せになります。それがどんどん広がっていけば、学校のみみんなが幸せになります。私は、「半径五メートルの幸せ」が、世界を平和にする第一歩になると信じています。そしていつか、国も民族も宗教も超えて、たくさんの人々の優しさが広がり、世界中が戦争のない平和な世界になることを願っています。

## 4 私たちが今できること

あずま北小学校 六年 有馬<sup>ありま</sup> 愛桜<sup>あひん</sup>

今世界には、貧困や紛争、気候変動、感染症など多くの問題があります。このような問題を解決し、人類が地球で暮らし続けていくために、二〇三〇年までに達成すべき目標としてSDGsが設定されました。この目標を世界中で達成しようと取り組んでいます。

最近、ニュースでもSDGsについて話されているのをよく見ます。その中でも、私が一番印象に残っているのは、「海の豊かさを守ろう」ということです。海は私たち生き物にとってなくてはならない大切なものです。現在海洋汚染が問題になっていますが、海や海洋資源を持続的

に利用するためにも、失われつつある海の豊かさを守っていく必要があります。海洋汚染には主に五つの原因があります。中でも特に気になるのが、「生活排水」と「海洋プラスチックごみ」を原因とするものです。

まず「生活排水」です。私たちが生活で使っている洗剤や調味料が川などに流れ、それが世界中の海に流れて、海が汚れてしまいます。私は学校で、霞ヶ浦の水質について学びました。そこでは、「水の汚れがお風呂何杯分の水で魚の住める水になるのか」ということを教えてもらいました。その時に、一番おどろいた

ことは、「使用済みの天ぷら油二十ミリリットルを川に流すと、魚が住める水にするために、お風呂二十杯分の水が必要」ということでした。もし川や海に汚れを流してしまったとしたら、魚にどのような影響があるのでしょうか。洗剤などで汚れた水はアオコなどが発生し、海洋生物にとって住みづらい環境になってしまいます。また、生活排水で出た油を取り込むことで、死んでしまう生物がいます。一度、生態系が破かいされてしまえば、海の豊かさはなくなり、私たちの生活や健康にも影響が現れると言われています。そこでこの先の十年後、二十年後を豊かに過



ごすために、どんなことに取り組んでいけばよいか考えてみました。私は、家庭科の授業で環境に配りよするため、食器や調理器具を洗う前に汚れや油をふき取ることを学びました。これをみんなが実践していけば、洗剤の使用量が減り、汚れも水に流さずにすむと思います。

次に「海洋プラスチックごみ」です。私たちは日常的にプラスチックを使っています。そのごみを川などに捨てると、川から海に流れ出てしまいます。そうするとそのごみを海の生き物たちが食べてしまったり、体にからみついてしまったりします。また流れ出たごみが小さく分解され、マイクロプラスチックになり魚に取り込まれます。その魚を人間が食べたらのような影響があるかはまだ分かっていません。

では、海に捨てられるごみの量はどのくらいなのでしょう。なんと年間八百万トンもあります。ニュー

スで砂浜をうめつくすような大量のごみがあるのを見て、私はしょげきを受けました。もし、二〇五〇年までに対策をしなければ、ごみの量が魚の量を上回ると予想されています。私たちのあずま北小学校では、

毎年クリーニング活動というものをを行っています。これは登校中に、通学路に落ちているごみを拾うという活動です。空き缶やビニールのごみがたくさん落ちているのをこれまで見てきました。もし、このごみが川に流れてしまったら、いずれ海に流れ魚に影響を与えてしまうのです。簡単にごみを捨てない、ごみが落ちていたら拾う、使わなくなったものは再利用してもらおうなどして、

ごみを減らしていくことが大切だと思います。

私たちができることは小さなことです。しかし、それを積み重ねていくことがSDGsの目標達成の第一歩となるのではないのでしょうか。これからも自分ができることを見つけて、地球の環境を守っていききたいと思います。

## 5 SDGsと私たち

江戸崎中学校 二年 神保 宥介

僕が住む稲敷市には、まだ蚩がいます。ただ、昔と比べてずいぶん減ってしまったと聞いたことがあります。蚩を夏の風物詩と本当に言えるようにするにはどうしたらよいのか、たくさんの生き物が住みやすい街になるようにするにはどうしたらよいのか、少しずつできることから環境問題に向き合っていきたいと考えています。

本やテレビなどで登場人物たちが山へ出掛けると、よく「空気がおかしい。」と言っています。初め、聞いているうちは、なぜ空気がおかしいと言うのか、考えていました。そんなある日、都会に出掛けることが

ありました。慣れもあるのかと思いつつも、違和感がありました。そのまま過ごしていました。次の日、家に帰ると一気にすがすがしい気持ちになりました。都会に慣れている人からすると、より一層気持ちが良いと感じると思います。「空気がおかしい」という言葉の意味をやっと理解できた瞬間でした。

小学校の授業やニュース番組で環境問題について知るたびに意識が高まり、自然ともっと関わっていきたいと思うようになり、僕は、住んでいる地域で自然に関する活動をしていることを知りました。

そこで去年、地域のごみ拾いに参

加しました。車に乗っているときに見える量よりも多く、できるだけ見逃がさないようにゆっくり見ながら拾っていくと、たくさんの物が見つかりました。一番多く感じたのは、飲み物の缶やプラスチック容器です。探そうと思つて探すと、いろいろな所から見つかるのでなかなか前へ進めずに、時間がかかってしまいました。このごみの中には、風で飛ばされてしまうなど、結果的にポイ捨てのようになってしまったものもあるかもしれませんが、中には明らかに意図して捨てられているようなものもありました。他にも草むら

の中に隠すように捨てられているも



のや洗濯機などの大型の粗大ゴミもあり、悪いことだと知っていないながらも、捨ててしまうのはなぜだろうかと思いました。

物を買う時は何をかうか、どこでかうかを自分で選びます。それは自分がほしいもの、自分の役に立つものを手に入れるためではないでしょうか。そして、自分のことはできるだけだけ良い方を選ぶようにするのは、ほとんどの人があてはまるのではないのでしょうか。それが捨てるとなると、どうなるのでしょうか。ものを捨てることは、多くの場合、自分のものではなくなるということだと思います。その後が自分に関係なくになると、本来の捨て方ではなく、楽に捨てられる方を選ぶときがあり、ここでポイ捨てに繋がるのではないのでしょうか。少し大変でもごみ箱に捨てるのか。自分の物ではな

くなるからポイ捨てするのか。物を使い終わったとき、近くにごみ箱があるとは限りません。だからといって、楽な方を選ぶと後にはさらに大変なことになるかもしれません。私は、道ばたで火の残ったタバコを見ることがあります。冬だったので、処置が遅れていたらと思うと怖くなりました。だから、一度踏み止まり、ゴミを捨てたあとのメリットが大きい方法を探してみるのはどうでしょうか。

SDGsの目標十五「陸の豊かさを守ろう」では、陸上や淡水地域の生態系、自然の恵みを守り持続可能な形にすることが挙げられています。陸は私たちが主に生活する場所なので、とても身近な目標といえるでしょう。ポイ捨てをなくすことができれば、他の十一、十二、十四の目標達成に貢献することができると思

います。

先ほど述べた通り、ごみを捨てるということは自分の物ではなくなるということですが、しかし、自分と関係がなくなるわけではありません。捨てる時も買う時と同じように考えてみると、何をかうかは「何を捨てるか」ということではないでしょうか。まだ使える物は残しておいたり、リサイクルショップなどに持って行ったりすると良いと思います。どこでかうかは「どこに捨てるか」ということにつながります。しっかりとごみ箱へ捨てることや、分別することでもリサイクルすることができま

す。たくさんの生き物、人が住みやすい街。そういった街にすることが私の思いです。自分でできることから、少しずつ環境問題に目を向けていきたいです。

## 6 素敵な未来のために

新利根中学校 二年 濱田 珠実

みなさんは、AIを身近に感じる  
ことがありますか。

私がAIを身近に感じるようになっ  
たのは、小学五年生のリモート学  
習を体験したときでした。その頃  
世界では、新型コロナウイルス感  
染症が流行し、緊急事態宣言下で、  
校に行くことができませんでした。

それまで学校生活において、タブ  
レットを活用して学習する機会は多  
くはありませんでした。学習塾の中  
にはいろいろな問題を解きながら、  
苦手なところをAIで分析して、そ  
れを克服できるような手立てを講じ  
てくれるところもあるという話を聞  
いたことがあります。勉強だけなら、

一人一人の成績を分析し、それぞれ  
にあった学習を進めてくれるAIの  
方が、より効果的なのかもしれませ  
ん。

しかし、リモート学習を体験して、  
体育の授業や休み時間などに、みん  
なで一緒に活動したり、先生や友達  
と直接話したりすることができな  
い寂しさを感じました。

緊急事態宣言が解除され、学校へ  
行くことができるようになってか  
ら、友達と一緒に遊んだり体を動か  
したりしたことで、リモート学習で  
AIを活用することはとても便利だ  
けれど、人と直接会って、人と人  
との温かみのある交流をすることも、

とても大切なことだと思いました。

また、新型コロナウイルス感染症  
の流行は長期間にわたり、私達の生  
活に多大な影響を及ぼすようになり  
ました。それに伴い、学習や日常生  
活でもインターネットで調べること  
があると「AIによる概要」として  
AIの考えが出てきたり、シヨッピ  
ングモールや飲食店に行ってもい  
ろいろな種類のロボットを見かけ  
るようになったり、AIはますます  
私たちの生活に深く関わるようにな  
りました。他にも自動運転技術や医  
療、農業など様々な面で、新しいA  
Iの技術が開発されて、私たちの生  
活を助けてくれています。実際に医



療や農業の面でも、AIを活用している人を多く見かけられるようになりました。それほどAIは、身近なものになっていくのです。自動運転技術や医療技術でのAIの発展が進むのは、AIが人間よりもミスが少なく、細かい作業をこなせるからなのでしょう。

AIは、人間のようなミスはしません。しかし、AIにも欠点があります。自動運転技術や医療技術でも、絶対に事故が起これないと言い切ることはできません。だから、いつAIが間違いをおこしても制御できるように、人間も常に学び、進化し続ける必要があると思います。これはAIの導入により、人間の思考力が奪われてしまうのを阻止することにもつながるのではないのでしょうか。また生成AIでは、訓練データに含

まれるバイアスや偏見を学習する傾向があるため、生成されたコンテンツや意思決定にも、バイアスや偏見が反映される可能性があります。これは今の時代、多様性についての理解が深まっている中、とても深刻なことだと思います。このような問題は、AIには感情がないから起こることなのではないのでしょうか。感情、これは人間にはあつてAIにはないものです。

AIは私たちの現在の生活に欠かせない存在になっています。しかし、AIに頼ってばかりいると人間は成長できなくなってしまう。人の気持ちを理解できる人間と、効率的に仕事のできるAIには、それぞれ長所と短所があります。人間とAIが互いの良さを生かして、足りないところを補い合い、共存することが

できたら、今以上に素敵な未来になるのではないのでしょうか。私はそんな未来が楽しみです。

## 7 意識し続けること

桜川中学校 二年 飯嶋 真由

意識し続けることで、できなかったことができるようになる。それは、私がこれまでの学校生活や自宅での体験を通して感じたことです。今日は、そう感じた理由を二つの出来事を通してお伝えしたいと思います。

まずは、挨拶に関する出来事です。中学校に入学したばかりの頃、私は声が小さかったこともあり、挨拶が苦手でした。勇気を出して挨拶しても、声が小さいと相手になかなか届きません。また、挨拶したいと思っ

ていても、緊張して声さえ出ないこともあり、はがゆい思いをしていました。そんなある日、私が入った委員会で「あいさつ運動」という活動が始まりました。それは朝、学校の昇降口に並んで、登校してくる人たちに「おはようございます」と挨拶をするという活動です。初めの頃は、勇気ももてず、自分から挨拶できないことがよくありました。しかし、相手から挨拶されるととても嬉しく、もつとたくさんの人と挨拶

したいと思うようになりました。そこで、相手が挨拶してくれるのを待つのではなく、自分から挨拶することを意識しようと思えました。「自分から」を意識してしばらくすると、私は声が大きくなり、そして驚くほど挨拶ができるようになりました。しかも、あいさつ運動だけでなく、

教室などでも、誰かに会うとずっと声が出るようになったのです。「自分から」を意識し続けたことで、こんなにできるようになるのかと、私は驚いたのと同時に嬉しくもなりました。

そして、私の苦手だった「返事」でも意識し続けることで変化が起きました。私の所属している吹奏楽部には「十ヶ条」があり、その一つに「誰に対しても必ず挨拶、言われたことは必ず返事をする！」というものがあります。私は前期の終わり頃まで、少しずつ挨拶はできるようになっていましたが、返事をするのが苦手でした。だから積極的にやる



うとしませんでした。しかしその頃、次にあるコンクールに向けて当番制で部長を回す「一日部長」が始まったのです。自分の番になり、みんなに指示を出したときに、返事が返ってくるとほっとして、返事が返ってこないと不安になることに気がきました。そこで、返事の大切さを実感し、どんなときでも返事をすることを意識し、実行すると決めました。意識し続けた今では、まだ、いつも大きな声で返事とはいかないけれど、前よりも声が出て、返事ができるようになっています。

自宅での出来事もあります。以前の私は、電気をついたら使い終わった後に消すことや、エアコンがついている部屋を出たときにドアをしっかり閉めることなど、自分が使った場所を次に使う人が気持ちよく使え

るようにすることをしよつちゅう忘れていました。それで、家族から注意を受けて反省する、ということは何度も繰り返し返していました。気を付けているつもりでも忘れてしまい、気を付けて生活しても無駄なのではないかと思つたこともありました。しかし、意識し続ければ変わるかもしれないと思ひ直し、実行することにしたのです。気がつくつと、ほぼ忘れず行動することができるようになつていて、今までのことが嘘のようでした。意識し続けることの力をここでも感じる事ができたのは、私にとつてはとても大きな経験でした。「ほんの少しの意識でも、意識し続けると、できなかつたことができるようになる」ということを実感したのです。

なりたい自分になる・・・意識し

続ける」ことが、そうなるための一つの方法だと思ひます。忘れ物や挨拶など自分のことから交通ルールや地球温暖化など世界のことまで、この大きさは関係なく、どう行動をすれば実現できるのか考えて、ほんの少しでもそれを意識し続けると、きっと自分の目指している方向に変わつていけるのだと思ひます。意識から変えられることはたくさんあります。こうしたい、こうなりたい、と思つたことを大切にこれからも生活していききたいと思ひます。

## 8 挨拶の力

東中学校 二年 関 義孝  
せき よしたか

挨拶とは、

「生活していく上で最も大切なものである」

と、私は考えています。そのように考えるようになったのは、一年前の四月、中学校に初めて登校した日の出来事がきっかけでした。

入学式を終え、初めての登校日となったあの日。周囲の生徒たちが続々と昇降口に向かう中、私は校門前で、一人呆然と立ち尽くしてしまいました。それがどうしてか、皆さん分かりますか。私はこの瞬間、慣れない環境への不安や緊張に支配され、どうしていいか分からなくなっていましたのです。この時、私の頭

の中は、霧がかかったように真っ白になっていました。

その時、「おはよう！」という声  
が、後ろから聞こえてきました。それは、同じ小学校出身の同級生からの挨拶でした。この挨拶が聞こえた瞬間、私の頭の中の霧はスーッと晴れていったような気がしました。友人からの挨拶は、重りのように支配していた不安や緊張を全て吹き飛ばし、中学校生活の最初の一步を踏み出せなかつた私に、勇気をもたらしてくれました。この時、  
「ああ、挨拶とはこれほどまでに素晴らしいものだったのか。」  
と、強く心を感じたのを覚えていま

す。挨拶には、「人の気持ちを前向きにする力」があると思います。

私たちは、何かに失敗してしまつた時など、不安な気持ちになつたり、落ち込んだ気持ちになつたりすることがあります。そんな時に、「ドンマイ!」「切り替えよう!」などの前向きな声掛けがあると、気持ちが切り替わり、よりポジティブな考えをもつことができるようになります。挨拶もそうした声掛けと同じように、人を前向きにしてくれるのです。「おはよう」「こんにちは」「こんばんは」という、何気ないやり取りは、お互いを前向きな気持ちにして、よいスタートを切らせてく



れるものなのだと思います。

「挨拶には愛がある」

この言葉を皆さんはご存知でしょうか。この言葉は、多くの地域や場面で使用されている、挨拶を広めるためのスローガンです。私が挨拶について、インターネットで調べていたとき、初めて知った言葉でした。私はこの言葉にとっても感銘を受け、その通りだと思いました。

人を前向きな気持ちにさせるための挨拶には、相手を思いやる「愛」が必要です。挨拶を不愛想に、そっけなくすると、果たして相手を前向きにすることはできませんでしょうか。きつと、「ああ、この人は私に興味が無いのかな」とか「もしかして迷惑だったのかな」などと、相手をマインスな気持ちにさせてしまうでしょう。相手の目をしっかりと見て、

相手へと声が届くように、はっきりと挨拶をすることが大切だと思います。このようなよい挨拶が、相手の気持ちを前向きにするだけでなく、一日のよいスタートを切ることに繋がるでしょう。

私は、あの日の朝の出来事をきっかけに、友達と会った時、先生方と廊下ですれ違う時、部活動を行う時、外出する時など、様々な場面で、気持ちのよい挨拶ができるように、いつも心掛けています。そしてこれからも、大きな声で、はっきりと、相手へ「愛」が伝わるように、挨拶をしていきたい、と思っています。

## 9 社会に向けて

江戸崎総合高等学校 二年 高須 美羅唯

最近、私たちは自分たちの声を発

信する機会を得ることが増えてきました。私たちはこれからの未来を担う存在として、自分たちの主張をしつかりと社会に伝える必要があると強く感じています。

初めに、環境問題についての重要性です。地球温暖化や自然災害という問題が最近、目立っていると感じます。これらの問題は私たちの未来に大きく関わり、影響を与える可能性があります。だから、環境保護に向けて積極的な取り組みが必要であることを社会に伝えていきたいです。そのためにも、私たちができるリサイクルや節電などの小さなこと

から始め、説得力を持てるように行動していきます。

次に、教育の重要性についてです。私たちは将来を担う立場として、整った環境で良い教育を受ける権利を持つてしていると私は思います。しかし、現状では、教育格差やいじめなどの問題が存在しています。私たちは、すべての子どもたちが安全・安心な環境で学べるように、整った環境を作っていくということが大切だと、声を上げて伝えていく必要があると考えます。私たちだけでは変えることが難しいこともたくさんありますが、大人の方々にも協力していただきながらより良い方向へ変えて

いけたらと思います。

さらに、社会問題に対する理解と関心を深めるための情報発信も大切だと感じています。

SNSなどのツールを活用し、私たちの考えや意見を発信することで、社会とのつながりを強めていくべきだと思います。同時に、偏見や差別をなくし、みんなが平等に扱われる社会を実現するためにも、私たちは、一人一人が思いやりを持ち、一人一人が自分らしさを尊重し、よく考えて積極的に行動していくことが大切だと私は思います。

青少年の主張、私たち若者の意見は決して小さくないし、無駄なもの



ではないと思います。軽視されるべきではありません。私たちは自分たちの未来に夢と希望を持つべきです。そのためにしっかりと責任を持ち、社会に主張を伝えていこうと思います。

しかし、自分の意見を主張する、大人に向けて伝えるということは、全然簡単なことではありません。すごく難しいし、とても勇気がいることです。

だから、大人の方々にはもっと私たちに寄り添ってほしいです。否定から入るのではなく、それがたとえどんなことでも一回受け止めてほしいです。そうすれば、私たち青少年がもっと自分の意見を伝えやすい雰囲気ができ、ちよつとでも誰かが救われたり、気持ちが悪くなったたりするのかなと私は思いました。

これからも、積極的に声を上げ、社会がより良い方向へ進むように、ちよつとでも貢献できたらなと思います。どうか私たち青少年の意見に耳を傾けていただき、一緒によりよい未来を目指していきましょう。これからの未来、今よりたくさん笑顔が増えますように。

## 10 干しいもで変える未来

江戸崎総合高等学校 二年 福島 朔弥

みなさんは、今年の一月一日に起

きた能登半島地震を知っていますか？この地震の被害想定は死者七人、避難者二七八一人、建物の全壊一二〇棟の被害を見積っています。また、珠洲市は県の地域防災計画の想定避難者七六八人に基づき、一千人の三日分の食事、九千食分を備蓄していました。しかし、実際の避難者は県内全域で想定の一十二倍である最大三万四千人、珠洲市でも想定の一九倍である七千人にまで上りました。実は各市町村の備えの指針となった県の地域防災計画は、一九九七年度の公表以来、再三指摘を受けながら見直されていなかった

のです。

私は、学校で食品に関することを専門的に学んでいます。例えば、食品製造という授業では、実際に農産物に触れながら、食品の成分特性を活かした加工の仕方やその原理、食品衛生などについて学びます。また、課題研究という授業では、自分たちで課題を設定しその課題解決に向けて実験・実習を行います。私は、この授業内で「さつまいもの品種の違いによる食味の調査」に取り組んでいます。五月末にサツマイモの苗を定植し、栽培管理と生育調査を行ってきました。十月頃に収穫を行い、干しいもへ加工する予定です。私は

将来、食に関する仕事に就きたいと考えており、学校で学んでいることを被災した方のために活かさないかと考えました。その結果、私はオリジナルの非常食を開発したいと考えるようになりました。

能登半島地震のような非常事態では、様々な問題点が生じます。例えば、被災地において野菜が不足したり、非常食を手渡されてもその調理法が複雑でよく分からず、同じような食品しか口にできなくなったりします。そのため、ビタミンやミネラル、食物繊維などといった栄養素が不足してしまい、健康を損なうリスクが高まります。このようなことを



知り、私は「干しいも」がこの問題解決の一助にならないだろうかと考えました。

干しいもは食物繊維が豊富であり、主食の置き換えが可能となります。ビタミンEやビタミンB<sub>1</sub>、カリウムといった栄養素も多く含まれているため、被災地で不足しがちな野菜の代替とすることもできます。さらに、干しいもはカロリーや脂肪分、添加物が抑えられているため、幼い子どもでも食べることができます。加えて、新陳代謝の活発化による腸内環境の改善や、白米よりも低いGI値による血糖値上昇の抑制などの効果により、生活習慣病を患っている方も干しいもなら口にできると考えます。

以上のことから、干しいもは保存性や栄養価が高く、腹持ちがよいた

め非常食に向いていると考えます。

私は今後、高校の授業において、サツマイモを干しいもへ加工する予定です。その際に、幅広い方が食べやすい大きさやカットの仕方、乾燥状態の比較による食味と保存性のバランスなど、様々な干しいもの状態を試作し、将来的には非常食への応用を目指していきたいと思えます。高校生である私がこのような活動をすることによって、震災直後の支援だけでなく、継続的な被災地への支援を円滑に進められる第一歩になれるのではないかと考えます。たくさんの方々に食を通して役に立ち、世の中へ貢献したいです。

今年は、日常生活の中に問題意識を見出し、それについて考えて実践しようとする発表と、社会事象の課題に目を向けてどのような未来をつくりたいかを考える発表に分かれました。学級の問題への取り組み、個性の尊重、平和と思いやり、

以前仲裁した友達が一緒に止めてくれるようになりました。寧音さんの級友を大切に人と向き合う姿が友達に勇気を与えたのです。寧音さんの姿勢は級友を思い、共に実践する仲間を増やしていくと思います。

環境問題、AI、挨拶と自己実現や勇氣、社会への情報発信、オリジナルの非常食についてと多岐にわたるテーマで、発表者の思いが十分に伝わる内容です。

新利根小学校六年・松浦彩愛さんは、弟との関わりを母親から論されてきた経験から、人の個性や心を大切にしたいと思うようになりました。個性や心の違いが毎日の生活を楽しくすると考えるようになり、悲しいことや辛いこと、失敗の積み重ねが人格を形成していくことに気が付き、互いに支え合って生きていくことの大切さに思いをはせるようになりました。彩愛さんの人の個性や心を大切にしようという気持ちは、必ず豊かな人間関係を築いていきます。

江戸崎小学校六年・菅谷寧音さんは、口論が原因で仲直りできない級友を見て、口論を見たら止める決心をしました。実際に仲裁したら「関係ない」と言われて自信を失いかけてましたが、口論のたびに仲裁を続けました。その寧音さんの姿を見て、

あずま東小学校六年・今泉志歩子さんは、ウクライナ侵攻から平和について考えました。従軍した曾祖父の「戦争ほど怖いものはない」の口癖を聞き、自分ができることを考え「半径五メートルの法則」で自分の身の回りから平和にしようと思いましたが、級友から労われて幸せな気持ちになった経験から、友達から貰った幸せを他に分けたいと思いました。志歩子さんの優しさや思いやりは友人たちに勇気を与え、優しさにあふれた教室をつくっていくと思います。

あずま北小学校六年・有馬愛桜さんはSDGsのニュースから生活排水とプラスチックごみが海洋汚染の原因であることを知りました。生活排水は、家庭科の授業で食器等を洗う前に汚れや油を拭き取ることを学びま

した。また、毎年八百万トンのプラスチックごみが海に捨てられることを知り、安易にゴミを捨てないことやゴミ拾い、再利用によりゴミを減らしていくことを考えました。自分ができる実践を積み重ね、愛桜さんの仲間を増やしてってください。

江戸崎中学校二年・神保宥介さんは、都会に出かけてから空気がおいしさを実感し、環境問題へ関心を持ちました。ゴミ拾いを実践し、ポイ捨てを無くすにはどうすればいいか考え、いつかは捨てることを考えて購入する必要があり、使える物は残してリサイクルショップに持って行き、ゴミを減らしていくことを考えました。稲敷市の夏の風物詩である蛸を守り、人間だけでなく、動植物にも住みやすい地域にしたいという宥介さん

の思いにとっても共感できます。

新利根中学校二年・濱田珠実さんは、新型コロナウイルス感染症の流行による登校制限をきっかけに、AIについて考えました。珠実さんは、AIが身近で欠かせないものになるからこそ、人間も学び進化を続ける必要があると考えました。生成AIが、バイアスや偏見を学習してしまう傾向を心配し、人の感情を理解できる人間と効率性に優れたAIの長所が補い合い、共存できる未来をつくりたいという珠実さんの思いは、人類の未来にとって大きな課題と考えます。

桜川中学校二年・飯嶋真由さんは、挨拶や返事が苦手でしたが、挨拶されて嬉しかった経験や、返事が返ってこないと不安になることに気づき、「自分か

ら」を意識し続けて取り組んでいたらできるようになりました。その経験から、なりたい自分になるために、それを意識し続けることの大切さに気付きました。問題意識をもつことは、自己を成長に導く第一歩です。これからも「自分から」を意識し、自己実現を叶えていってください。応援しています。

東中学校二年・関義孝さんは、初めて登校して不安で緊張していた時、同じ小学校の同級生から「おはよう」と挨拶されて不安や緊張が解消し、勇気を与えられた経験から、挨拶は生活をする上で最も大切なものと考えようになりました。義孝さんは、挨拶は人の気持ちを前向きにする力と考え、相手に伝わるように相手の目を見て声が届くよう、挨拶することを大切にし

て実践しています。挨拶で仲間「愛」を伝え、みんなに勇気を与えていってください。

江戸崎総合高等学校二年・高須美羅唯さんは、自分たちの主張を社会に伝えたいという思いがあります。環境保護や教育について、大人たちと協力して良くしたいという思いです。社会問題へ関心をもち、理解を深めるための情報発信をし、思いやりをもって他を尊重して行動するために、私たち大人にも自分たちの気持ちを受け止めて寄り添う姿勢を求めています。大人たちと一緒によい未来を目指したいという美羅唯さんの思いを大切にしたいです。

江戸崎総合高等学校二年・福島朔弥さんは、能登半島地震から、学校で学ぶ自分の専攻分野を活かして被災者に役立てるた

め、オリジナルの非常食を開発したいと思いました。栄養価が高くバランスが良い干し芋が最適と考え、サツマイモを干し芋へ加工する予定です。食べやすさや食味、保存性などを考慮して試作し、将来は非常食への応用を目指したいと考えています。自分の専門を活かして社会に貢献しようという朔弥さんの決意を心から応援します。

最後になりますが、自分の思いを真剣に考えて発表された発表者の皆さん、お忙しい中で丁寧にご指導いただいた先生方、子どもたちのためにご支援いただいた関係者やご家族の皆様にご感謝申し上げます。講評とさせていただきます。

《青少年育成稲敷市民会議》

会 長	和 田 克 典
副 会 長	高 野 貴 世
副 会 長	篠 田 啓 子
副 会 長	糸 賀 妙 子
大会部長	白 田 京 子
	伊 藤 均 勉
	小 貫 好 美
	板 橋 久 美
	寺 崎 本 浩
	根 本 充 子
	宇 佐 美 千 枝
	坂 本 川 幸 子
	助 野 澤 貞 子
	根 本 恭 一
	飯 塚 卓 也

〈主 催〉 青少年育成稲敷市民会議

〈協 力〉 稲敷市・稲敷市教育委員会・稲敷市校長会